

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	関野 文子
論文題目	狩猟採集民バカの食物のシェアリング		
（論文内容の要旨） 本論文は、カメルーン東南部の熱帯雨林地域で暮らしている狩猟採集民バカの食物分配を対象として定量的データを軸にすえた民族誌的記述をおこない、それをふまえて食物のシェアリングの特徴について論じたものである。 序章では、狩猟採集民の食物分配（手元にある食物を他者にわたす行為）に関する行動生態学と文化人類学・生態人類学の研究をレビューし、本論文の視座と論点を提示した。 第1章では、バカの食習慣と調査地の概要をまとめた。今日、バカの社会では定住化が進行し、農作物の重要性が増していることをふまえて、本論文では、特徴の異なる三つの調査地を定めた。小規模農耕と近隣農耕民への労働提供を生業の軸とする定住集落のL村サイト、道路沿いの集落から30km離れた森のキャンプのZ村サイト、開発プロジェクトが実施され、多くのバカが農作物を自給しているA村サイトである。 第2章では、L村サイトとZ村サイトを対象とし、異なる集団、異なる環境における分配を比較した。両サイトとも、きわめて頻繁に食物分配がなされ、L村では227回の調理と777回の料理の分配、Z村では233回の調理と922回の料理の分配を記録した。L村ではキャッサバを主とする農作物、Z村ではヤマノイモを主とする野生植物が、分配回数の75%程度を占めていた。両サイトで分配された食物はまったく異なるものであったが、植物性食物が大半を占めている点では共通していた。これら植物性食物は安定して入手できる資源であることから、収穫の不安定性にまつわるリスクの低減が食物分配の第一の要因であるとは考えにくい。 第3章では、L村とZ村で記録した分配を対象として、分配する者とされる者との関係性を分析した。分配相手は二つのカテゴリーから構成されていた。一つは親子関係やキョウダイ関係にある世帯であり、それらへの分配はランダムに分配相手を選ばれた場合と比較して有意に高い頻度で生じていた。もう一つはそれより遠縁の世帯で、そこでは血縁関係と分配頻度は相関しておらず、調理のたびに分配相手が入れ替わる傾向があった。また、両カテゴリーとも、血縁関係の遠近にかかわらず二者間における分配の授受回数に偏りがあり、分配の返礼をまつことなく同じ相手への分配がくりかえされていた。 第4章では、A村サイトにおけるバカの食物分配を分析した。分配された料理の内訳（大半が農作物）は他の二つのサイトと同様の傾向があったが、調理回数あたりの分配数は少なかった。この結果は、開発プロジェクトによる農耕の普及と現金経済の浸			

透のため、食物分配の頻度や範囲が少しずつ変化している可能性をしめしている。

第5章では、食物分配についてのバカ自身の語り、および分配の前後における相互行為を分析した。バカは、いつも同じ相手に分配するのはよくないと語るが、分配する相手を決めるさいに以前に分配してくれた人を優先すべきだとか、以前に分配した相手が返礼をしないのは問題だ、といった語りは確認できなかった。また、生業活動での協働、調理場への訪問、食物の要求、調理した食物の分量など、複数の要因が絡まりあって、そのつど分配相手選ばれていた。

終章では、バカの食物分配の実践を「シェアリング」として位置づけ、その特徴について論じた。バカの食物分配は、各々が容易に入手できる食物を毎日のようにやりとりし、分配の相手は流動的で、授受の回数は均衡していない、という傾向があった。一方で、数多くの先行研究で指摘されてきたように、バカの社会では平等・対等な関係が実現し、維持されている。贈与や互酬的交換の論理にもとづけば、二者間において授受の回数に偏りが生じると、一方が他方にたいする負い目をもつことになり、両者の関係は変質するはずである。しかし、バカたちのあいだでは、そうはなっていない。つまり、負い目とは切り離された実践であるという点にこそ、バカの食物分配の、そしてシェアリングという実践の独自性があると指摘した。